



# 山陽スピリット ニュース No.23

2021(令和3)年2月26日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

## 山陽学園大学、山陽学園短期大学との出会い、そして今！

山陽学園大学 平成23年卒業  
元山陽学園短期大学 非常勤講師

蟻 正 博 美

私と山陽学園大学との出会いは、平成19年4月の入学式に遡ります。コミュニケーション学部コミュニケーション学科臨床心理・カウンセリングコースの一期生として、桜が美しく咲き誇る校門をくぐっての入学式は、当時57歳の私にとって、第二の人生の始まりの日でもありました。

入学後は、若い同期生や留学生との出会いもあり、親子ほど歳の離れた友達も徐々にでき、一緒に授業を受け、分からないことは教え合いながら楽しく過ごすことができました。また、それぞれの授業科目を担当なさる先生方との貴重な出会いがありました。

心理学の分野以外でも、中国語の班先生、古文書の今は亡くなられました太田先生、英語の清水先生、久保田先生にも授業では大変お世話になりました。

特に、英語のテストでは、苦手意識もあり、悪戦苦闘しましたが、大学で英語を学び直せたことが、その後、心理士分野の勉強をする際にも大いに役に立ちました。

また、「文章表現法」では佐藤先生に、一般的な文章から、学術的な論文の書き方まで、文章を書くための基本を教えていただきました。これは、大学卒業後、大学院に進学し、修士論文を作成する際にも、現在、臨床心理士として仕事をする上でも活かされています。

臨床心理・カウンセリングコースの先生方(濱田先生、石原先生、上地先生、高橋先生、松浦先生)が担当なさる専門科目は、私の興味のある授業ばかりで、毎日が新鮮で、生き生きとした日々を過ごしたことが、今でも忘れられません。

特に、ゼミで大変お世話になった石原先生には、卒業まで懇切丁寧なご指導をいただきました。入学当初

から、臨床心理士を目指していた私にとって、ゼミを受ける日が待ち遠しく、休んだ日は一日もなかったと思います。当たり前のことだとは思いますが、言い換えれば、“休みたい”と思った日は一日もなかったということです。

石原先生は、どのような時も学生一人ひとりの考えを尊重し、指導するというスタイルでした。卒業論文の執筆においても、学生が自発的に考えるようにという方向付けをしてくださったと思います。卒業論文の提出の前日には、石原ゼミの学生が大学に集まり、先生のご指導を受け、卒業論文の最後の手直しをしました。何度も何度も書き直し、確認を繰り返しながら、自分の論文が完成した時には、これまでにない達成感を味わうことができました。

この時の卒業論文のテーマは、現在の私の仕事に繋がっており、石原先生には今も感謝の気持ちで一杯です。



石原先生(右)と私

私は山陽学園大学を卒業した後、本学で研究生として一年間、勉強させていただき、川崎医療福祉大学の大学院に進学しました。この大学院在学中に、思いがけず、山陽学園短期大学の幼児教育学科(現：こども育成学科)で非常勤講師をさせていただくことになりました。大学、大学院では、教えていただく立場しか経験したことのなかった私が、短期大学の学生達を相手に、どのように授業を進めれば、幼児教育を学んでいる学生の心に残り、意義のある授業になるのだろうと試行錯誤しながら、夢中で授業の準備をしていました。思えば、大学院生として研究することと、非常勤講師として教えることの両立は、簡単ではなかったはずですが、不思議に「大変だった」「辛かった」という記憶はありません。

非常勤講師として、大切にしてきたことは、山陽学園のモットーである「愛と奉仕」の心を常に念頭に置くことで、これを第一の目標にしました。そして、第二の目標は、一人ひとりの学生に温かい心で接するということでした。ここで学ぶ学生が、幼児教育現場に出た際に、“一人ひとりの子ども達と温かい関わりを大事にして欲しい”との思いからでした。そのために、毎回実施したことは、授業前の出席をとる際に、必ず名前をフルネームで呼び、一人ひとりの学生と目を合わせて頷く（アイコンタクトをとる）、ということをししようと決めました。



オペレッタを披露する学生たち

「乳児保育」の授業では、保育実習に使える乳児のおもちゃ作りと、実習で使用する名札作りの時間を必ず取り入れていました。この時間は、学生たちの表情が一変し、きらきらと輝き、通常の授業では見られない特技を発揮し、おしゃれなデザインの素敵な名札が次々に仕上がっていきました。できた作品を実習に活かして欲しいと願っておりましたが、実習後に、「先生、子ども達が喜んでくれたよ」という言葉が聞け、大変感激しました。また、「授業で教えてもらった手遊びを子どもとやったよ」と報告を受けることも度々あり、「良かったね」とがんばったことを共に喜び合いました。

さて、山陽学園大学、山陽学園短期大学との出会いは、令和になっても続きましたが、世界中を脅かした新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、これまでの生活が一変していくことになりました。このような状況下で、乳幼児健診の場で心理士として働き、乳幼児に関わる自分の責務を考えた結果、令和元年度を最後に、十年あまりの非常勤講師にピリオドを打たせていただく苦渋の決断をいたしました。

令和2年、コロナ禍で、世の中が自粛モードの日々、偶然、上代淑先生遺訓「日々のおしえ」のポストカードを手にする機会がありました。山陽学園大学、山陽学園短期大学のキャンパスの写真8枚に添えられた「日々のおしえ」の言葉は、私自身が日頃、大切にしてきた思いと重なることに気づき、改めて山陽学園との縁を感じる事ができました。

『日々のおしえ』2日：「清く正しく あかるく強く 心に愛を育てよう」は、これまで幼児教育の現場で、保育士としてたくさん子ども達と過ごしてきた私自身の精神そのものであったのです。

『日々のおしえ』31日：「広い大空のように ゆたかな心を」は、私が最も好きな言葉です。ポストカードの31日の写真は、D棟の入り口から、空を見上げる構図ですが、とても素敵な写真です。

ポストカードの写真は、在学生や教職員から募集したということですが、日々、学園で生活している人にしか捉えることのできない瞬間を切り取ったような写真が多く、プロのカメラマンが撮影した写真とは、ひと味違う輝きを放っていると感心しました。

山陽学園大学、山陽学園短期大学との出会いは、私にとって貴重な財産です。これまで出会った諸先生方は、それぞれが「愛と奉仕」の体現者であり、学生指導の中で、意識するとしなやかにかかわらず、日々「愛と奉仕」を実践していらっしやっただのと思います。

今後、世の中が大きく変化することがあっても、山陽学園の「愛と奉仕」の精神は古びることなく、新しい時代にもきっと受け継がれてゆくべきものだと確信しています。

山陽学園大学、山陽学園短期大学のますますのご発展をお祈りいたします。

